



記事

- ▷ 巻頭言
- ▷ 体育哲学考
- ▷ 書籍紹介
- ▷ 私の研究
- ▷ 学会参加報告
- ▷ 事務局より
- ▷ 定例研究会のお知らせ
- ▷ 次号予告！

巻頭言

日本学術会議騒動について考える

林 英彰（京都教育大学）

約7年8か月にわたって内閣総理大臣を務めた安倍晋三氏が辞意を表明し、この原稿を書いている時点では、既に菅義偉氏が職務を引き継ぎ、間もなくひと月を経過しようとしています。安倍氏の首相在職は、合計日数においても連続日数においても歴代最長であり、長期間重責を担ってこられたことについて、まずは感謝の意を表したいと思います。

ところで、菅新総理が、日本学術会議の会員候補者として推薦された105名の内、6名を任命しなかったことが波紋を広げています。主流派メディアは、「学問の自由脅かす暴挙」（朝日新聞）、「看過できない政治介入」（毎日新聞）などと語気を強め、連日、菅氏批判を展開しています。

菅氏は、「総合的、俯瞰的に判断した結果」であることを繰り返し、これに対し批判側は、「納得できる説明をせよ」と繰り返し、ある種の水掛け論状態に陥っている感があります。

批判と応答が噛み合わないのは、批判者側が学術会議を学者の聖域のようにとらえているのに対し、政府側は、学術会議を政府機関ととらえていることによるのだと思います。

そうこうしている内に、学術会議にまつわる悪評が、主にインターネット経由で拡散されるようになってきました。「軍事研究禁止」、「復興特別税」、「レジ袋有料化」など、国民の安全を蔑ろにし、国民を窮地に追い込むような提言ばかりに熱心なのではないか、といった指摘が相次いでいます。軍事研究については、日本の研究者に禁止する一方で、「学＝軍一体」となっている中国の研究団体とは交流促進の方向で動いているのはいかがなものか、という指摘もあります。

このような指摘の可否についてはさまざまな意見があるでしょうが、私自身は学術会議批判の側に相当の妥当性を認める者です。先般、本会とも関係の深い学会の会員に対して照会された、学術会議声明に関する意向調査に対しては「反対」の意見を届けました。学術会議の提言自体に賛同できないことが多いということもありますが、学協会への意見聴取のあり方にも大いに疑問を感じているからです。

11年ほど前、私の大学がとんでもない大騒動に巻き込まれたことがありました。現役の学生6名が性犯罪の容疑で逮捕されたのです。メディアは連日、彼らを凶悪犯罪者として大々的に報道し、大学は大混乱に陥りましたが、逮捕後3週間ほどで、刑事事件としては「不起

訴」という決着を迎えました。

学生らは、大学が下した「無期停学」等の処分を不服として民事訴訟を提起し、約2年後に原告勝訴の一審判決（京都地裁）を得ました。この判決は、「原告は性犯罪者ではない」とする事実認定を基本とし、後に大阪高裁の二審では、大学の裁量権についての解釈が変更されて原告敗訴となり、最高裁でも高裁判決が支持されましたが、犯罪性の認定については一審が踏襲されました。

私が、この一連の訴訟経過において、極めて不思議に思ったのは、京都地裁の一審判決後に生じた現象です。とある著名な女権団体の有志が、地裁判決に対する緊急声明を発表し、賛同者を募ったところ、ひと月半ほどの間に1000人を超える賛同者が集まったのですが、何と、「声明文の起草者は判決文を読んでいない」ことが「声明文中に明記」されていたのです。

この民事訴訟には閲覧制限がかかっていたから、訴訟当事者以外に公開される情報は限定的だったのですが、私は、原告学生に依頼されて証言台に立ったことから、かなり詳細な情報を得ていました。その立場からすれば、この緊急声明なるものは、噴飯物以外の何者でもないのですが、その噴飯物に1000人超の（原理的に判決理由を理解していない）賛同者が集まってしまうことに、何とも言えない不気味さを感じたものです。

この噴飯物に賛同する1000人超と今回の件で学術会議に与する人々が、私の中では重なってしまうのですが、皆さんはどう思われるでしょうか。

林 英彰 (hayasi@kyokyo-u.ac.jp)

体育哲学考

体育哲学考「遠隔授業の身体」

田中彰吾（東海大学）

新型コロナウイルスの感染拡大のため、大半の大学では後期も遠隔授業が継続されていることだろう。私の所属先でも、少人数の演習や実習科目のみ対面で実施し、他はすべて遠隔を継続するという対応になっている。私の場合、学部の講義科目ではパワーポイントに音声を加えたスライドショーを配信し、大学院ではオンライン会議システムを使ったリアルタイムの授業を実施している（体育の実技科目を担当していないので残念ながらそちらの実情は存じ上げない）。遠隔授業を実施していると身体性に関連して思うことがいろいろとあるので、その一端をここで記しておきたい。

オンデマンド型授業では、基本的には一人で授業のスライドショーを作成する。教室という空間に集っているわけではないので、聞き手である学生たちの身体に自分の身体を共鳴させることができないし、間身体性から始まる授業の「場」を作っていくことができない。対面授業では、たいてい三～四回経つころに教室内に特有の雰囲気ができあがり、それを体感としてつかむことができるのだが、遠隔授業にはその過程がまったくないのが気になる。学生の様子を見ながら特定の話題を掘り下げたり、脱線しつつ楽しく集中する雰囲気を作ったりということもまずできない。提出されるレポートを読み続けると学生の学力が向上していくのは理解できるが、教室で学びの場が深まっていく感じとは随分違う。

授業内容だけを伝達するならむしろ遠隔のほうが効率は良いようにも思う。しかし教室内での非言語の身体的交流が乏しいことは、学生にも確実に影響を与えている。彼らは個別に学習用の資料を視聴しているため、教室で受講するときのように、他の学生と交流する機会がない。周囲の学生の反応を見ながら、自分の理解度がどのレベルに位置づけられるのか、暗黙の感触を得ることができない。教室内で他の受講生と中間集団を作ることができないせいで学生が二極化し、ひたすら真面目に授業についてこようとする者と、小さなきっかけで脱落する者に分かれていくように見える（実際、前期の授業では「秀」と「不可」が通常より多かった）。

リアルタイム型の授業は、オンデマンド型に比べればずっとやりやすい。ただ、微妙な違和感がいまだ拭えずにいる。私をもっとも困惑しているのは視線の問題である。単純なことだが、学生と視線が合わないのである。アイコンタクトは他にも多数ある非言語的コミュニケーションの一チャンネルに過ぎないとも言えるが、そう考えるだけでは解消できない何か授業後の体感に残る。もちろん、授業中カメラはオンになっていてモニタ上に筆者の上体も映し出されているし、受講生の姿も映し出されている。筆者が学生たちを見ているのと同様に、彼らも筆者の姿を視覚的に確認している。

ただし、見るのがこうしてカメラに媒介されている限り、視線が合うということは決してなく、それにとまなう「他なる主体との出会い」も生じることがない。サルトルが「身体の第三の存在論的次元」という概念に沿って論じているが、自己は、自己の身体が他者の知覚対象になることで初めて、自己の身体の向こう側に「主体としての他者」が現れるのを感知する。カメラに媒介され、学生の眼差しを直接に受け取ることでできない筆者の身体は、どこことなく落ち着かない浮遊感のようなものを授業後に感じる人が多い。これは、眼差しを介して互いに出会うことができず、他者を視線の向こうに感知することもなければ、他者が自己を主体として感知することもできなくなるからであろう。

つまり、自己と他者は、「客体としての身体」を介して出会うことで、互いが主体として存在することを確認し合っているのだが、オンライン・システムに媒介されることで、互いのプレゼンスについての感覚がどうしても鈍るのである。もちろん、その分、言語的メッセージがコミュニケーションにおいて占める比重が上がり、遠隔のリアルタイム授業では授業内容についてしばしば密度の濃い議論がなされるというメリットはある（学会もそうである）。だが、伝達される情報の密度が高ければそれで授業としては十分だということになるだろうか。良い授業とは何なのか、この機に改めて考えさせられている。

田中彰吾 (shogot@tokai-u.jp)

書籍紹介

広瀬一郎(2014)新しいスポーツマンシップの教科書(Gakken)

尹熙喆 (朝日大学)

昨年度、研究報告として「カント道徳哲学とスポーツ倫理」という図書を学内出版で発行した。その内容をまとめてみると、「スポーツにおける倫理性とは何か」という基本問題に対し、佐藤臣彦のスポーツ構造論における感性的契機の「文化的相対性」を理論的に克服するため、カントの道徳哲学に基づくことによって、「スポーツ倫理」における普遍的基盤を明らかにしようとするものであった。この話は、研究者同士であれば意見を交わしたり論じ返したりすることができるが、体育やスポーツを専攻とする学生であればどのくらい理解できるだろうか、そして指導者であればスポーツ現場にはたして応用することができるだろうか。

2020年8月5日、スポーツ界に蔓延した人権侵害および不正腐敗を総括するコントロールタワーとして、韓国文化体育観光部（日本の省に相当）はスポーツ「倫理センター」を発足した。倫理センターは、国民体育振興公団や警察庁との業務協約を結び、人権侵害防止のための予防教育、不正体育指導者に対する公正な処分、体育の公正保護などのために協力システムを構築し、体育界の公正文化を拡散させるための韓国政府の革新的な動きとして思われる。

これまで、私の研究が現場で有効であろうか、妥当でありながら信頼を得られるか、研究のための研究を進んでいるのではないだろうか、果たして実践場に活用でき、有効に使えるか、といった懐疑的な考えを今でも持っている。近年、オリンピック開催によってスポーツについて国民的な関心が高まっている一方、スポーツ倫理に解決を要請するさまざまな出来事が起こりつつあり、社会変化に伴ってスポーツに関する認識が、かつてはないほど関心が注がれている。

広瀬一郎の著書は、「スポーツとは」「スポーツマンとは」「スポーツマンシップとは」という問いにあなたは、すべて答えられますか、スポーツをする人、スポーツを子どもたちに教える人に知ってもらいたいこの三つの要素について、わかりやすく解説、さらにスポーツが好きになる内容で構成していると語る。各章の内容を見ると、「第1章スポーツってなんだ!?!」「第2章スポーツマンシップってなんだ!?!」「第3章スポーツマンシップを教える意味」「第4章これがスポーツマンシップだ!」「第5章スポーツマンになる方法」「まとめースポーツマンシップとレジリエントな「生き方」の関係」「おわりにー2020年に向かって」であるが、なぜルールや相手やゲームを尊重するのか、審判に抗議する時の考え方、スポーツマンシップをどのように教えるかなどについても誰でも理解しやすい内容で書かれている。

理論に立脚しながら論証することが、研究においては確かに必要であるが、文化様式としてスポーツを学んでいる現在、選手や家族をはじめスポーツを楽しんでいる人々にスポーツの持つ価値について幅広く理解できる一冊である。著者は、「現代のスポーツとは何かを考える場合、どのように捉えるとスポーツは楽しいか、どのように捉えるとスポーツは社会にとって有用か、とのふたつの側面があるが、スポーツは根底で現実生活と深く関わって現実社会で役立つ人間を育てるために開発されたソフトであり、スポーツを通じてスポーツマンシップを身に付けたかっこいい大人があふれば、よりよい世界になることは明らかかなはず」と言う。

繰り返すが、体育・スポーツ哲学を専門とする私は、その領域に存続され、物事について論理的に検証しようとする習慣が身に染みているが、スポーツが文化である以上、体育・スポーツ哲学が「みんなの体育・スポーツ哲学」になることを考える時、本書は有用な一冊ではないかと思う。

尹熙喆 (yun@alice.asahi-u.ac.jp)

私の研究

「中村敏雄を考える」から「中村敏雄から考える」へ

岡田悠佑（早稲田大学）

私は幸運にも、大学生の頃から、体育を専門とする教員や研究者がそのあり方について語り合う場に居合わせ機会に恵まれた。そこでの議論は生産的なものとなることもあるが、(多くの方々が経験あると思うが・・・) ややもするとお互いがお互いの主張をぶつけるだけで落としどころの見つからない議論に陥ることもあった。私は、このような議論を眺めながら色々と思案をするも、自分なりの考えをうまく示せない無力さにモヤモヤしながら帰りの電車に揺られることもしばしばであった。今思うと、このような体育のあり方をめぐる議論におけるモヤモヤ体験が私の体育思想研究の原点である。このモヤモヤを解消するために、私は大学院に進学し、本格的に勉強を始める中で中村敏雄氏(1929-2011:以下、「中村氏」)の著作に偶然(必然?)出会い、そして魅了されていった。中村氏は、ご存じの通り戦後という時代に「よい体育とは何か」を体育の現場に身を置きながら考え発信し続けた人物であり、その文章に当時の私は何とも表現できない魅力を感じた。そして、やみくもに中村氏の著作を読み進め、その著作への理解を深め、最終的には中村氏の体育思想を研究対象とするに至った。

このようなことを背景に私は中村氏の体育思想研究にたどり着いたが、その態度は二つに大別できる。一つは、中村氏から学ぶ態度である。例えば、中村氏の最初の問いとも言える「体育とは何を教える教科か?」という問題提起は、教科横断やカリキュラムマネジメント等の教科の垣根を超えた学びが求められる昨今においてこそ問われる問題と言えよう。数十年前の中村氏の原稿が現代に通じる問題提起となることもしばしばであり、現代においても多くの学びを提供してくれるのは言うまでもない。そして、もう一つの態度が、中村氏の限界を見定める態度である。中村氏が思索をした1950年代後半から1990年代は、東西冷戦構

造を背景として、教育をめぐる議論が文部省 vs 日本教職員組合という枠組みに規定された時代である。このような時代的制約と中村氏も無縁ではなく、私は、中村氏の思想の二項対立構造の問題を中心にその限界を模索してきた。

さて、これらの二つの態度で中村氏の体育思想に向き合ってきた私は、現在、これらの二つの態度を昇華させた態度、つまり、中村氏の限界を自覚しながらもその問題提起や分析の視点を踏襲しながら現代の新たな問題として再構成することを目指している。詳細は割愛するが、戦後の「体力問題」と「オリンピック・パラリンピック教育」（以下、オリ・パラ教育）を対象に研究を進めている。前者の「体力問題」は、中村氏の体育思想の形成に（批判的対象として）大きく影響を与えており、同時に戦後の体育のあり方をめぐる議論において常に問題とされてきた。後者のオリ・パラ教育は、2021年に延期となった東京で開催されるオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、オリ・パラ大会）に向けて、アスリートによる講演や交流活動、障害者スポーツ体験、オリ・パラ大会の歴史についての学習等を通して、スポーツの文化的な意義や価値に対する国民の理解を深める取り組みである。オリ・パラ教育は体育に限定した取り組みではないが、スポーツの文化的な価値の理解を中心に据える考え方こそ中村氏の体育思想の根幹であり、同時にこれまでの体育で軽視されてきた側面でもある。一見無関係のように見えるこれらの研究は、私の中では中村氏を結節点としてつながっている。今後も、中村氏に対する二つの態度の間で、体育の未来を紡ぐ研究を目指して精進していきたい。

岡田悠佑 (okadayusuke69@aoni.waseda.jp)

学会参加報告

横浜スポーツ学術会議に参加して

佐藤雄哉（国士舘大学）

本稿を執筆するにあたり、以前の会報、特に国際学会の参加報告を参考にさせて頂くべく、改めてそれらの原稿を拝読した。どれも異文化交流により生み出されるどこか新鮮な空気や、長時間のフライトにより凝り固まった身体の調子がありありと記されており、何かワクワクするような書き出しから始まるものばかりであった。欲を言えば私もそのような書き出しから始めたかったのだが、現実にはそうは行かない。なぜなら、世界的なパンデミックを引き起こした新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が未だに猛威を奮っているからである。そのため、2020横浜スポーツ学術会議（The 2020 Yokohama Sport Conference）は当初予定されていたパシフィコ横浜での開催から形式を変え、9月8日～22日の2週間、オンライン上にて行われた。『多様な人々が共に生きる世界をめざして：体育・健康・スポーツ科学の貢献 “Contributing to a Sustainable World”』のテーマが設定された本大会は、ライブ配信、オンデマンド配信、資料掲載を駆使したものとなり、私も発表用に用意していた資料を掲載させて頂く形で本大会に参加することとなった。

大会初日に行われた Yokohama2020 特別セッションでは、各国の新型コロナウイルスによるスポーツの状況を中心に展開されたが、どのパネリストのセッションを聴く限りにおいても、この半年間でスポーツ文化は多大なダメージを受けていることがわかる。在宅勤務などによってできた時間を運動に当てたと言うポジティブなケースも一部紹介されていたが、全てのセッションで運動の機会が損なわれていることが大きな問題として挙げられていた。現に日本においてもオリンピック大会を始めとする多くのスポーツイベントが延期・中止を余儀なくされ、個人的な運動の機会すら失われてしまっている。私事ではあるが、私も今年の4月に開催予定であった東京五輪柔道競技日本代表最終選考会（全日本選抜柔道体重別選手権大会）への出場が内定していたのだが、残念ながら出場は叶わなかった。開催されていたとしても、私の階級はリオ五輪王者の大野将平が早々に代表内定していたので、選考会としての役目はなかったのだが…。ともあれ、スポーツに携わる人間がスポーツの機会を奪われ

ることの無念さは、この半年間至るところから強く感じるものである。

さて、そのような「競技」スポーツに携わる者としての視点から眺めてみれば、慶應義塾大学の神武直彦教授によって行われたシンポジウムは大変興味深いものであった。「スポーツパフォーマンス向上のためのシステムデザイン」というテーマで展開され、パフォーマンス向上のためにはそれに関わる行動をシステム思考で捉える必要があるという内容だった。つまり、「全体俯瞰と構成要素のつながりを意識して、多視点・構造化・可視化する」のである。この試みはコロナ禍のスポーツ政策においても、重要なもののように感じる。問題を一元化することなく、社会情勢とスポーツをシステム的な視点から見ることも私たちに求められることのひとつなのだろう。

このように、シンポジウムやセッションが動画配信されることで、興味深いテーマやわかりづらい点を繰り返し見直せることは今大会の良い点であったと思う。また、同時翻訳が行なわれたこともありがたい。常時の国際学会に比べて、より深い理解を得ることができたと感じる。一方物足りなかつた点としては、資料掲載方式での発表は、コミュニケーションを取るには些か不便であることだ。アプリやインターネットなど、いくつかのツールやサービスが用いられていたが直観的に分かるレベルのものではなく、少し煩わしさも感じた。また、資料掲載方式での発表は、何より面白味が少ないものであり、それは致し方ないものと思いつつ寂しくもあつた。鋭い質問を投げかけられあつたことや、発表の緊張感から開放され夜の食事を楽しむこともまた、学会の醍醐味だなと感じた次第である。

兎にも角にも、今回の学会大会は多くの課題と展望を示したように感じる。ただ個人的見解としては、当たり前前に学会大会が開催され、先生方から強烈な意見をいただけるような社会へと戻ることを願うばかりである。

佐藤雄哉 (yusato@kokushikan.ac.jp)

事務局より

高岡英氣（敬愛大学）

2020年度の本専門領域総会については、新型コロナウイルス感染症への対策を踏まえて下記のように実施したくご案内申し上げます。

日 時：2020年12月5日（土）17:00～18:00（予定）

*第2回定例研究会終了後

方 法：Zoomによるオンライン会議

配信元：本領域事務局 (bureau@pdpe.jp)

配信先：本領域会員 ML (talk@pdpe.jp)

*迷惑メール設定の変更を
お願い申し上げます

手 順：

①総会資料の配信（総会1週間前）

②Zoomで出席できない会員からの質問や意見等の受付（①の配信後3日間）

③会議 URL、ミーティング ID、パスコード等の配信（当日まで）

④Zoomによる総会の開催

総会の議題などの詳細が決定した後、事務局より本領域 ML や HP を通じてお知らせします。本領域 ML への登録が済んでおられない方がいらっしゃいましたら、事務局 (bureau@pepe.jp) までお問合せください。

定例研究会の
お知らせ

森田啓（千葉工業大学）

体育哲学専門領域 2020年度第2回定例研究会
日時：2020年12月5日（土）9：00～16：00
オンラインによる開催

※オンライン開催における閲覧情報はメーリングリストで配信しますので、メーリングリストへの登録をお願いします。

次第

代表挨拶 関根正美（日本体育大学）

研究発表① 荒牧亜衣（武蔵大学）

演題：〈オリンピック・レガシー〉再考：2013年以降における日本国内先行研究の検討から
概要：〈オリンピック・レガシー〉という概念が、大会招致の文脈において積極的に使用されるようになったのは、2000年前後のことである。今日では、将来開催されるオリンピック競技大会を肯定する道具として、さらには、過去の大会を再評価する枠組みとしても用いられるようになったことが指摘されている。本発表では、東京2020大会招致が決定した2013年以降における日本国内の先行研究の検討を通じて、この概念の実態について明らかにすることを試みる。

副代表挨拶：深澤浩洋（筑波大学）

次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿下さいます方は、広報担当：佐々木（sasaki@e.yamagata-u.ac.jp）までお問い合わせ下さい。

.....

体育哲学専門領域会報第24巻第3号

発行者 日本体育学会体育哲学専門領域
関根正美（代表）
編集者 田井健太郎、佐々木 究、阿部悟郎（広報担当）
発行日 令和2年11月4日
連絡先 〒263-8588
千葉県千葉市稲毛区穴川1-5-21
敬愛大学経済学部 高岡英氣 気付
電話：043-251-6363（代表）

【編集後記】

生涯の中で何回くらいパラダイムシフト'Paradigm shift'を体感するだろうか。直近の半世紀弱の中では、経済システムの変化や金融危機、未曾有の災害、病気、技術革新などによって、価値観、生活様式そして社会システムが大きく変化することを感じた。トーマス・クーン(Thomas Samuel Kuhn, 1922-1966)は、科学革命前後での規準や用語などの共約不可能性を指摘した。私はかつてこの意見について、感情的には疑いをもっていたが、いくつかの(私を感じた)パラダイムシフトを経た今は、体感的には共約不可能性は確かにあると思っていることに気付く。「それ以前」に思いを馳せるときに、懐古的にかつてを思い偲ぶことはできても、その時何を思い何に視線を向けていたのか、はっきりと心に思い描くことができないのだ。

2020年という年が記憶に残る年であることは間違いないにしても、この年に生きた自分が何を感じ、何を見ていたのかについて後年思いおこすことが困難となることに恐れをもってしよう。(T)